

MESSAGE from KEY PERSON
07 PHARMACY

はざま けんじ
狭間 研至さん
ファルメディコ株式会社 代表取締役
医師

薬局が医療のフロントラインになることで、地域に根付いた生活者に寄り添う医療が実現できる

薬局の店舗網を強みにして、薬局機能を強化

生活者にとって身近な存在である薬局。薬局数は、全国で53,642店舗(平成21年末時点)を数え、利用頻度の高いコンビニエンスストアの店舗数^{※1}、43,372店舗(平成22年12月時点)を上回る数値を示している。

全国に広がる店舗網を活用し、薬局が医療のフロントラインとしての役割を担うべきだと主張するのが、薬局の経営者であり医師の資格も持つ狭間研至さんだ。「薬局は全国どこに行っても身近な場所であり、薬局の扉を一つ開ければ、薬の専門家である薬剤師に相談できる環境にあります。生活者にとっては、何か健康に不安があった時、医師よりも気軽に接することができるのが、薬局の薬剤師と一言一語でよいでしょう。これからの薬局は、身近な医療機関として、医療のフロントラインという機能を果たしていかなければなりません。病院に足を運ぶ一歩手前の段階で、薬局の薬剤師が健康の相談役になることが求め

られているのです。健康の相談役になるためには、調剤の知識だけでなく、漢方やサプリメント、健康食品など、幅広い知識を身につけなければなりません。身につけた知識を地域に還元していくことで、薬局の薬剤師による生活者に寄り添う医療が可能になるのです」

医学的な知識を身につけることで、薬剤師の可能性は広がる

狭間氏は、医療のフロントラインとして、薬局が担うもう一つの役割に、在宅医療を掲げる。日本は超高齢社会を迎え、病院で高齢者を療養することは困難な状況になっており、地域全体で高齢者を支えていかなければならない時代へと向かっている。介護の状況が軽度であれば、自宅で療養することが求められ、その受け皿になるのが「在宅医療」なのだ。

それでは、薬局が在宅医療を担うために、薬剤師にどのようなスキルが必要になってくるのだろうか。

「在宅医療では、薬剤師が患者様の自宅に

直接お伺いし、薬の管理や説明などを行います。その時重要になるのは、目の前で困っている患者様の問題を、いかにして解決してあげるかなのです。薬剤師は、薬物動態など、薬学の知識においては超一流です。

しかしながら、医学的知識は十分に持っているとは言いきれず、目の前の患者様の症状を的確に判断できる状況ではありません。これからの薬剤師は、血圧や脈拍など、バイタルサインのチェックなども行うこと

狭間氏は、医師としての経験と知識を生かし、薬剤師に必要なバイタルサインなどの医学的知識が学べる仕組みを、講習会やWeb講座等を活用しながら構築している。狭間氏が目指しているのは、「人材」を重視した薬局経営である。

で、一人ひとりの患者様に適応した医療が提供できるようになります。患者様の症状に合わせて判断し、決断できる薬剤師になることで、医師や看護師などからも信頼が得られ、薬剤師が在宅医療で必要不可欠な存在になってくるのだと思います」

最後に、これから育っていく薬剤師に向けて、メッセージを伺った。

「薬学6年制が導入されたことは、薬剤師への期待の大きさが反映された結果だと感じています。これからの薬剤師には、できること、すべきことが数多く残されています。薬剤師を目指すという学生には、薬剤師の可能性を信じ、自ら掲げた目標に向けて力強く歩んでもらいたいです」

※1 厚生労働省「平成21年末薬事関係業態数」より引用

※2 (社)日本フランチャイズチェーン協会「2010年12月度JFAコンビニエンスストア統計調査月報」より引用

医師からの期待 その3